OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞キケロー『弁論家』（4）
Author(s)	渡辺, 浩司
Citation	大阪大学大学院人文学研究科紀要. 2025, 2, p. 217-236
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100808
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

キケロー『弁論家』(4)

渡辺　浩司　訳

凡例

1　キケロー『弁論家』(全238節) の75節から99節までの翻訳である。74節までの翻訳は、『大阪大学大学院文学研究科紀要』62 (2022) pp. 97–125、同63 (2023) pp. 97–114、『大阪大学大学院人文学研究科紀要』1 (2024) pp. 257–275に掲載されている。

2　底本は以下である。
Westman, R., *M. Tullius Cicero scripta quae manserunt omnia*, Fasc. 5 *Orator*, Leipzig, 1980.

3　ローマ数字はJanus Gruter版キケロー全集 (1618年) の区分を示す。アラビア数字はAlexander Scot版キケロー全集 (1588–1589年) の区別を示す。引用などでは前者を章、後者を節とする。

4　固有名詞について、ギリシア人名の場合はギリシア語形、ローマ人名の場合はラテン語形で表記する。ph、th、chの音は、それぞれp、t、kと同じ音とした。

5　本文中で用いた記号については、[　] は底本が不要とする箇所を示す。ダッシュは底本のダッシュないし括弧である。(　) は底本に記されたギリシア語とラテン語を、〔　〕は訳者の補訳を記す。底本に従わないときは注に記す。

6　章、節とは別に全体をいくつかの部分に区分けし、各部分の冒頭に見出しを付した。

7　注は、「キケロー『弁論家』(1)」渡辺浩司訳 (『大阪大学大学院文学研究科紀要』62 (2022)、pp. 97–125) からの通し番号である。

8　文献は「キケロー『弁論家』(1)」渡辺浩司訳 (『大阪大学大学院文学研究科紀要』62 (2022)、pp. 97–125) と同じである。追加すべき文献があるときはその都度注に記す。

三つの話し方の特徴と型

XXIII　75　さて次に、それぞれの〔話し方[127]の〕種類の特徴と型[128]を追究しなければなりません。これは、しばしば述べてきたように大きくて骨の折れる仕事です。しかし乗った以上は[129]、何をすべきなのかを考察しなければなりません。今、私たちがどこへ導かれようとも、私たちが帆を張らなければならないのは確かなのです[130]。

まず最初に私たちは、本当にアッティカ風と呼ばれている人だけを描写しなければなりません[131]。**76**　その人はひかえめで[132]、慎み深い人物であり[133]、普通の言葉遣い[134]を真似していますが、口べたな人たち[135]とは実際には意外に異なっているのです。したがって、この人の話を聞いている人々は、たとえ自分自身が上手な話し手でないとしても、この話し方でなら自分でも話すことができると思うのです。実のところ、この話し方の平明さは、評価する人には真似しやすいと思われるのですが、しかしやってみるとこれほど難しいものはありません。というのも、この話し方には血気が漲っていなくてもかまわないのですが[136]、最大限の活力を欠いているとはいえ、いわゆる健全な健康状態を保つためには[137]、ある種の生命力[138]を持っていなければならないからです。**77**　したがって、まず彼を、いわば韻律の鎖から解放することにしましょう。君も知っての通り、弁論家が使ういくつかの韻律があり――このことについては後で扱うことにしましょう[139]――、弁論家はある種の規則を守らなければならないのですが、それは他の種類の弁論の場合であり、この弁論の話し方の場合には韻律はまったく無視してかまわないのです。この弁論の話し方は、いわば［韻律に］縛られていないようなものなのですが、かといって勝手きままというわけでもありません。その結果、自由に歩き回っているように見えますが、節度なく放浪しているようには見えないのです。さらに言葉と言葉をいわば緊密に結び合わせるようなことも気にしないようにしなければなりません[140]。というのも、いわゆる母音連続（hiatus）と母音の衝突は[141]、ある種の緩やかさをもたらし、その緩やかさは、言葉よりも思想に注意を払う人の不快とは言えない無頓着さを示すことになるからです[142]。**78**　ところで、掉尾文[143]と言葉の結び合わせという二つについては、この話し方の弁論家はかなり自由になりますので、これ以外の他のことについて注意しなければなりません。すなわち、簡潔で短い語句は無頓着に取り扱われるべきではなく、むしろ、注意深く計算されたある種の無頓着というものもあるのです[144]。たとえば、化粧をしていないというまさにそのことが女性たちを飾っているにもかかわらず、こうした女性たちは「飾っていない」と言われるように、この平明な話し方は、飾られていなくても人を楽しませるのです[145]。どちらの場合にも、より多くの魅力をもたらすけれどもはっきりと表れてこない何かがあるのです。そのような場合、真珠のようなはっきりと見える装飾はすべて取り去ることになるでしょう。髪の毛のカールごて[146]も使わないで

しょう。**79** さらに人工的な白や赤の化粧品もすべて排除されるでしょう[147]。〔それでも〕優美さと清廉さだけは残ることでしょう。言葉は純粋なラテン語となり、はっきりと明瞭に語られるでしょう。ふさわしさが注意深く考察されることでしょう。**XXIV** ただ一つだけを欠くことになるでしょう。それは、テオプラストスがこの話し方の第四番目の長所に挙げたものです[148]。すなわち、快く、豊かに装飾することです。機知に富んだ周密な警句が、どこからか分かりませんが隠された場所から引き出されて配置されることになるでしょう[149]。これこそが、この弁論家の主要な特徴になるのです。しかし、雄弁術のいわば在庫は慎ましく使用されなければならないでしょう。**80** というのも、在庫はある意味では私たちのものだからです。その在庫は装飾からなっていて、一部は言葉の装飾であり、一部は思想の装飾です。ところで、言葉の装飾には、二つあります。一つは、単独の言葉からなるもので、もう一つは結合された言葉からなるものです[150]。単独の言葉は、――本来の日常の言葉の場合には[151]――、最も良く響くものや最大限に事柄を説明しているものが是認されます。しかし日常の言葉遣いから離れている場合には、別の所から借りてきた比喩、自分で新しく作った語、新語、古語、稀語が是認されます[152]――しかし、古語と稀語は、稀にしか用いられませんが、本来の言葉に分類されるべきです――。**81** 他方で、結合された言葉は、思想は変わらないのに他の言葉に取り換えると消えてしまうようなある種の均整[153]をうむならば、装飾となります。というのも、言葉を取り替えても思想が残る装飾は、実はとても沢山あるのですが、目立つものはほとんどないからです[154]。したがって、簡素な話し方をする弁論家は、もし洗練されている人ならば、新しい言葉を作るときには大胆になることなく、比喩を用いるときは慎重であり[155]、古語を遣うときは控えめにして、言葉や思想のその他の装飾を用いるときは節度を持ってのぞむことになるでしょう[156]。比喩は、都会の人々の言葉でも田舎の人々の言葉でも同じように、最も頻繁に用いられるでしょう。たとえば、田舎では、葡萄の木が「宝石をつける」、畑が「水を欲しがっている[157]」、作物が「幸福である」、穀物が「豊穣である」と言います[158]。**82** これらの比喩のどれもがかなり大胆なものですが、これらの言葉が借りてこられた元々の意味と似ています。あるいは、事物が本来の名前も持っていない場合には、楽しませるためにではなく、教えるために比喩が利用されます。口調をひかえめに抑えたこの弁論家は、他の種類の弁論家よりもかなり自由にこの装飾を用いるでしょうが、とはいえ最も壮麗な話し方で話すときほどには気ままではありません。**XXV** したがって、比喩が遠くの場所から取られ、他の話し方ならばふさわしかったかもしれないような比喩が慎ましい話し方で用いられるとき、ここでもまた、ふさわしさの欠如が現れてくるのです。ふさわしさの欠如がどのようなものなのかは、ふさわしさについて語られたことから理解されるべきです。**83** ところで、アッティカ風と呼ばれるのは平明な語りの弁論家だけではないのですが[159]、ある人たちが正しくアッティカ風と呼んでいる平明な語りの弁

論家は、均整というものを確かに利用しますが、しかし少しばかりひかえめに利用します。この均整は、光によって言葉の結合に輝きを与えるもので、この光をギリシア人たちはいわば弁論の姿のように捉えてσχήματα〔文彩〕と呼んでいます[160]。この同じ言葉が思想にも転用され用いられています。実際もし――宴会の準備をするときのように――、豪華にならないようにしながらも自分だけが倹約しているように見えるのではなく洗練されているように見えることを望むのでしたら、使用するものを選ぶことになるでしょう[161]。**84** 確かに、私が述べているまさにこの弁論家のつましさにぴったりの装飾がたくさんあります[162]。というのも、私が先に述べた[163]装飾を、たとえば、等しい長さの語句を並べること、似たような語末の語句を並べること、同じ文の終結、一つの文字を取り替えること[164]によって［いわば］生み出される優雅さといったものを、この鋭敏な弁論家[165]は、入念に均整を作ることと楽しみの効果を獲得することがあからさまにならないように避けなければならないからです。**85** 同様に、〔強調するために〕言葉を繰り返すこと[166]によってある種の緊張[167]と声の大きさが生まれるならば、それは、この弁論のひかえめな[168]話し方とは無縁のものです。彼〔この話し方の弁論家〕は、これ以外の装飾を自由に使うことができるでしょう、もし言葉の連続を解体し分割して、最も普通の言葉を遣い、最も柔らかい比喩[169]を遣うならばですが。さらに彼は、過度に明確なものとならないのならば、思想の光〔文彩〕[170]も遣うことでしょう。彼は、国家に語らせたり[171]、あるいは地下から死者たちを蘇らせたりする[172]ことはしないでしょう。あるいは多くのことをひとまとまりにして完全文の中に縛りつけることもしないでしょう[173]。これらの工夫は、もっと強い肺[174]に属することであって、私が今描いている弁論家に期待すべきことでもないし、要求すべきことでもないのです。というのも彼は、声においてと同じように話し方においてもより抑制的だからです。**86** しかし、装飾の内の多くは、この簡素さにふさわしいものです。もっともこれらの装飾を彼は粗雑に遣うのですが。こうした人を私は描いてきたのです。彼の口演は、悲劇のものでも舞台のものでもなく、身体の適度な動きに基づいているのです。しかし表情は多くの効果をあげています[175]。これは、いわゆるしかめ面をすること[176]によってではなく、一つひとつの言葉をどのような気分で述べているかを誠実に示すことによってです。**XXVI 87** この種の話し方には、さらに、冗談という塩がふりかけられることになります[177]。この塩は、〔人前で〕話す〔という口演の〕さいになるとかなりの効果をあげます。これには二つの種類があります。一つはユーモアで、もう一つはウイットです。彼〔この話し方の弁論家〕はどちらも利用することでしょうが、しかし一方は魅力あるように述べるときに、もう一方はあざけりの言葉を投げつけるときに利用します。後者には多くの種類があります。しかしながらそれは目下の議論とは関係ないことです。**88** しかしながら、私はあざけりを利用する弁論家に次のことを忠告しておきます。すなわち、あまり頻繁に用いておどけたようにならないように。

さらに、卑猥なものを用いて笑劇にならないように[178]、攻撃的になりすぎて傲慢にならないように、人の不幸を標的にして不人情にならないように、人の犯罪を標的にして笑いが憎しみにかわることのないように、自分の性格や審判者の性格や状況に無関係なものとならないようにと忠告します。というのも、これらはふさわしさの欠如とみなされるからです。**89**

彼はまた、手の込んだ、即席で作ったものではなく、家から持ってきた冗談を避けるでしょう。というのも、これらは大部分が冷めたものだからです[179]。彼は、友情と権威を大切にし、取り返しのつかない侮辱の言葉を避けるでしょう[180]。彼はただ敵対する者たちを針で刺すだけでしょう。といっても、いつも彼らを刺すというわけでもなく、彼ら全員を刺すというわけでもなく、どんな方法を使ってでも刺すというわけでもありません。例外的にウイットとユーモア[181]が用いられる場合がありますが、そのようなウイットやユーモアを、アッティカ風に話す今日の人々の中に私は認めることはありませんが、最もアッティカ風であることは確かです。**90** ［以上で、］ひかえめではあるけれども偉大で真のアッティカ風である弁論家の姿を私は描き切ったと思います。弁論の中にある塩味の効いたもの[182]や健全なもの[183]はなんであれ、アッティカの弁論家たちの特徴だからです。しかしながら、彼らの内のすべての人がユーモアがあるというわけではありません。リューシアースは適切ですし、ヒュペレイデースもそうです[184]。デーマーデースは他の人たちよりも優れていたと言われています[185]。デーモステネースはより劣っていると思われています[186]。しかし彼ほど洗練された〔都会風の〕ものは一人もいないと私には思われますが、彼は辛辣というよりもむしろ機知に富んでいたのです。辛辣さは荒々しい気性の特徴ですが、機知は技術の特徴なのです。

91 もう一つの種類は、今述べた平明な[187]種類に比べるとより豊かで、多少堅固なものなのですが、しかし、すぐ後で述べる[188]最も壮麗な種類に比べるとよりひかえめなものです。この種類には、最小限の活力しかありませんが、最大限の魅力があります[189]。というのも、飾り気のない種類に比べれば豊かなのですが、装飾豊かで富裕な種類に比べれば簡潔なのです。**XXVII　92** すべての装飾はこの種の話し方にふさわしく、話し方のこの形には最も多くの魅力があります。この種類の話し方に卓越したギリシア人たちが多くいましたが、私の判断するところでは、パレーロンのデーメートリオス[190]が他を凌駕していました。彼の話し方は、落ち着いて緩やかに流れる[191]だけでなく、移し替えられた言葉〔比喩〕と交換された言葉〔換喩〕があたかも星々のように彼の話し方を照らしているのです。移し替えられたと私がいうのは、これまでにしばしば言ってきたように、魅力を生み出すために、あるいは本来の適切な言葉がないために、類似性に基づいて他の事柄から移し替えられた言葉のことです。交換されたとは、適切な言葉の代わりに、他の事柄から因果性に基づいて取ってきた同じ意味の言葉を置く場合のことです。**93**　エンニウスが「私は城と町を奪われた」[192]と語ったとき、確かに移し替え〔転用〕によってそうなっているのですが、以上と

は別のやり方で移し替えたのです。また、[もし祖国の代わりに城をと語ったのであるならば]「荒れ狂うアーフリカが恐ろしい騒乱に震える」[193]と、アーフリカの人々の代わりにアーフリカと変えて語ったとき、また別のやり方で移し替えたのです。後者を弁論術教師たちはὑπαλλαγή〔換置〕と呼んでいます[194]。言葉と言葉が交換されているからです。他方で文法家たちはこれをμετωμυμία〔換喩〕と呼んでいます。名前が取り替えられているからです。**94**

しかしながら、アリストテレースは、これら二つと濫用を比喩に分類しました[195]。濫用のことをギリシア人たちはκατάχρησις〔濫喩〕と呼んでいます[196]。たとえば、小さい心と言う代わりに微細な心という場合です。私たちは、楽しませるために、あるいはふさわしくするために[197]必要だと思うならば、よく似た言葉を濫用するのです。たくさんの比喩が連続して流れるとき、まったく異なった話し方が生まれます。したがって、ギリシア人たちはこの種類をἀλληγορία〔アレゴリー〕と呼んでいます[198]。命名としては、彼らは正しいのですが、分類としては、これらすべてを比喩と呼んでいるアリストテレースの方がいっそう優れています[199]。パレーロンの人〔デーメートリオス〕[200]は、これらを最大限に頻繁に活用しています。そして活用された比喩は最も甘く、彼の著作の中には比喩がたくさんありますが、換喩は、他の弁論家と比べものにならないほどたくさんあるのです。**95**　同じ種類の話し方には（私は、中間の穏やかな話し方のことを言っているのです）、言葉の光すべてと思想の光の多くが適しています[201]。この種類の話し方をする弁論家は、さまざまな領域の学識ある議論を展開し、変な強調をすることなく共通トポスを利用することになるでしょう。なぜこの種の弁論家は、さまざまなことを語るのでしょうか。それは、こうした弁論家たちがたいていは哲学の学校の出身だからなのです[202]。そして私が今語っているこの種の弁論家は、もし公の場でもっと体力のある弁論家と比較されることがないならば、自分自身で自らを高く評価することでしょう。**96**　実際そこには、はっきりとしていて華やかで飾り立てられていて磨き上げられた話し方の種類のようなものがあります。この種類の話し方には、言葉のすべての魅力と思想のすべての魅力が織り込まれています。これは全体としてソフィストたちの泉から公共広場に流れたものですが、平明な弁論家たちからは蔑まれ、荘重な弁論家たちからは拒絶されて、今私が話している中間の種類に安住の地を見つけたのです。

XXVIII 97　第三番目は、壮麗で豊富で重厚で華麗な弁論家です[203]。ここに、疑いなく、最も大きな力があります。実際、この弁論家というのは、諸民族がこの弁論家の［語ることの］華麗さと豊富さを讃えて、この弁論家の雄弁が国家の中で最大の力を持つことを許してきたそういう弁論家なのです。しかも、この雄弁は大きな流れと音をともなって生まれ、すべての人々が尊重し賞賛する雄弁であり、すべての人が身につけることができないと諦めるような雄弁なのです。人の心に働きかけ、ときに人の心をあらゆる方向へ動かすのはこの種の雄弁の力です。この雄弁は、あるときは強引に突き進み[204]、あるときは感情の中にこっ

そりと忍び込みます。新しい考えを植えつけ、これまでの考えを引っこ抜きます。**98** しかしながら、話し方のこの種類と他の種類との間には大きな違いがあります。平明で明敏な種類において、巧みで抜け目なく語ることに努力をしてきて、それ以上の高みを目指すことのなかった弁論家は、平明で明敏な種類の話し方を一度でも完全に成し遂げたのならば、最大とは言えないけれども偉大な弁論家なのです。彼は、滑りやすい地面で転ぶこともないでしょうし、一度足場を確保すれば決して転倒することはないでしょう。これに対して、中間の弁論家は、適度で穏やかなと私が呼ぶ弁論家のことですが、もし十分に体勢を整えたのならば、語ることに伴う曖昧さとか不確かさといった落とし穴を恐れることはないでしょう。たとえうまくいかないときでも、これはしばしば起きることですが、大きな危険を犯すこともないでしょう。というのも、彼が高いところから転倒することはありえないからです。**99** しかしながら、私たちが第一であるとみなしている私たちのこの弁論家は、重厚で激しく燃えるような弁論家のことですが、彼がもしこの種類にだけ生まれついているのであるならば、あるいは、もしこの種類だけを練習してきたのならば、あるいは、もしこの種類だけに情熱を燃やし、他の二つの種類に自分の豊かさを混ぜ合わせることをしてこなかったのならば、彼は最も軽蔑されるべきなのです。ひかえめな弁論家は明敏に手際よく語るから賢いとみなされ、中間の弁論家は甘美だとみなされます[205]が、このとても豊かな弁論家は豊かさ以外に何も持っていなければ、正気とはほとんど思われないからです。何事も静かに語ることもできず、何事も穏やかに語ることもできず[206]、何事も配列に適切に配慮して、はっきりと、明確に、機知に富んで語ることもできずにいる[207]弁論家は、たとえある主題を全体としてこの〔荘重な〕話し方で取り扱い、また別の主題を部分的にこの〔荘重な〕話し方で取り扱うとしても、まだ耳の準備ができていない聴衆を前にして主題に火をつけ燃え上がらせ[208]始めるならば、正気の人たちの中で荒れ狂っている[209]ように、酔っていない人たちの中であたかも酔っ払って騒いでいるように思われることになるのです。

注

127)「話し方」は文体のことである。キケローは音声面を重視していて、書かれた言葉ではなく、話された言葉のことを言っている。「話し方」には、荘重な話し方、平明な話し方、中間の話し方の三つの種類がある。これら三つの種類については、20 節以下を参照。

128)「特徴(nota)」は、特徴的な印のこと。46 節を参照。「型(formula)」は具体的な型、種類のこと。36 節を参照。

129)「乗った以上は」。「船に」などを補うと意味がはっきりする。『ウェッレース弾劾』第 2 回公判弁論

（第5演説）160節に、「ウェッレースに対してあまりにひどい暴言を吐いたので、今船に乗ろうとする彼を（quem iam ingredientem in navem）下船させ勾留した」という表現がある。

130）『弁論家について』第2巻187節に「もし彼らが認めてくれるならば、今私が言ったように、私が駆り立てる方へと彼らが自発的に傾き向かってくれるならば、私は、与えられたものを受け取り、風が吹いてくる方へ帆を張る（Si se dant et, ante dixi, sua sponte, quo impellimus, inclinant atque propendent, accipio quod datur et ad id, unde aliquis flatus ostenditur, vela do;）」という表現がある。

131）キケローは、具体的に名前を挙げることはないが、リューシアースを念頭に置いているものと思われる。キケローは理想的な弁論家を描くことを目的としているので名前を挙げていないのだろう。キケロー以後のリューシアースの評価については、ハリカルナッソスのデイオニューシオス『リューシアース論』を参照。

132）「ひかえめな（summissus）」は、口調を抑えて話す人のことを形容している。26節を参照。

133）「慎み深い」は「humilis」の訳。Humilisは、「低い、浅い、つまらない、粗末な、卑屈な」という意味である。ここではこの形容詞は、三種類の話し方のうち平明な種類を記述するために用いられている。Humilisという形容詞が用いられているのは、この76節の他に、82節、91節、100節、192節、196節においてである。平明な種類を形容詞する言葉は、humilisの他にsubtilis〔平明な〕、tenuis〔簡素な〕がある。話し方の三つの種類については20節を参照。

134）日常会話で用いられる言葉のこと。『弁論家について』第3巻153節では、日常会話で使い古された古語が論じられている。

135）56節を参照。

136）「血気が漲っていなくてもかまわない（non plurimi sanguinis）」。「血気・血液（sanguis）」は雄弁の豊かさ、暖かさを意味する。『ブルートゥス』68節ではリューシアースとヒュペレイデースのアッティカ風の弁論に関して次のように言われている。「ローマ人たちは、アッティカ風の話し方に喜びを見出すと言う。それは確かに賢明なことだ。さらに彼らが、骨だけでなく血液も真似してくれたら良いのに！　彼らの目標は立派だ。――それなら、なぜリューシアースとヒュペレイデースは愛されているのに、カトーはまったく知られていないのか。彼の話は古めかしく、彼の単語はいわば荒けずりである。それは、当時の人々が話していたようなものだ。それを変えなさい、当時彼ができなかったことだが。韻律を付けなさい。弁論が緊密に構成されるようにするために、単語そのものを配列し結合しなさい。これは、古いギリシアの弁論家たちも決してしなかったことだ。カトーより前には誰もいないということが君は分かるだろう。（Attico genere dicendi se gaudere dicunt. Sapienter id quidem ; atque utinam imitarentur, nec ossa solum sed etiam sanguinem! Gratum est tamen quod volunt. — Cur igitur Lysias et Hyperides amatur, cum penitus ignoretur Cato? Antiquior est huius sermo et quaedam horridiora verba. Ita enim tum loquebantur. Id muta,

quod tum ille non potuit, et adde numeros et ut aptior sit oratio, ipsa verba compone et quasi coagmenta, quod ne Graeci quidem veteres factitaverunt : iam neminem antepones Catoni.)」。『ブルートゥス』36節でも「血液」が「活力」の意味で用いられている。『ブルートゥス』36節の邦訳は注62を参照。またクインティリアーヌス『弁論家の教育』第8巻第3章6節、第10巻第1章60節、第10巻第1章115節、第10巻第2章12節、第11巻第1節34節を参照。

137)「活力(vir)」と「健康(valetudo)」が組み合わされた表現は、『最高の種類の弁論について』第8節を参照。『ブルートゥス』64節では、リューシアースについて、「彼〔リューシアース〕には熱心な信奉者たちがいる。彼らは身体の太った状態よりも痩せた状態を目指す。健康状態が良いなら、細っそりとしていること自体が彼らを喜ばす――リューシアースにはしばしば筋力さえもあり、したがって誰よりも頑丈であることができるけれども。確かに彼は全体としては他の人よりも痩せている――、しかしながら、彼には、まさにこの痩せていることを非常に楽しむ賞賛者たちがいるのだ。(Habet enim certos sui studiosos, qui non tam habitus corporis opimos quam gracilitates consectentur, quos, valetudo modo bona sit, tenuitas ipsa deledtat — quamquma in Lysia sunt saepe etiam lacerti, sic uti fieri nihil possit valentius ; verum est certe genere toto strigosior —, sed habet tamen suos laudatores, qui hac ipsa eius subtilitate admodum gaudeant.)」と言われている。『善と悪の究極について』第2巻64節でも「健康(valetudo)」が用いられている。

138)「ある種の生命力(sucus aliquem)」については、『弁論家について』第3巻96節に「従って、弁論はまず弁論の一般的な種類によって、そしてその種類のいわばある種の色彩と生命力によって飾られる。弁論が重厚であるために、魅力的であるために、教養あるものであるために、上品であるために、賞賛されるものであるために、磨かれたものであるために、必要な限りの感情と苦痛を持つために。一つひとつの部分である四肢に属するのではない。これらは、弁論という身体全体において判断されるのである。(Ornatur igitur oratio genere primun et quasi colore quodam et suco suo ; nam ut gravis, ut suavis, ut erudita sit, ut liberalis, ut admirabilis, ut polita, ut sensus, ut doloris habeat quantum opus sit, non est singulorum articulorum ; in toto spectantur haec corpore.)」とある。また同書第2巻88節、93節を参照。『ブルートゥス』36節では、「血液・活力(sanguis)」と共に「生命力・活気(sucus)」が用いられている。この点については注217を参照。同36節の邦訳については注62を参照。また、『アッティクス宛書簡集』92(Shackleton Bailey)IV. 18(Vulgata)には、「国家の生命力と血液を(sucum ac sanguinem ... civitatis)」という表現が見られる。

139) 164節から236節を参照。

140)「言葉を緊密に組み合わせること(coagmentare)」は、『ブルートゥス』68節でも言われている。注217を参照。『弁論家について』第3巻171節では、「言葉の配列というものに属するのは、言葉の流れが耳障りにならないように、また母音連続が生じないように、しかし言葉が何らの仕方で組

み合わされて滑らかになるように、言葉を配置して構成することである。(Conlocationis est componere et struere verba sic, ut neve asper eorum concurusus neve hiulcus sit, sed quodam modo coagmentatus et levis ;)」と言われている。クインティリアーヌス『弁論家の教育』第 8 巻第 6 章 62 節以下を参照。

141) 底本では「母音連続は母音の衝突によって（hiatus concrusu vocalium)」となっているが、クインティリアーヌス『弁論家の教育』第 9 巻 4 章 37 節にしたがって「母音連続と母音の衝突は（hiatus et concrusus vocalium)」と読む。キケローが「母音連続（hiatus)」という語を用いている唯一の箇所である。同じ語根の「口を大きく開ける（hio)」に関しては、32 節で hiantia が、152 節で hiabant が用いられている。「母音連続」をギリシア人たちは避けようとした。「母音連続」については、クインティリアーヌス『弁論家の教育』第 9 巻 4 章 33 節から 37 節を参照。

142) 母音連続ないし母音衝突は許容されるべきか否かについては、クインティリアーヌス『弁論家の教育』第 9 巻 4 章 35 節も参照。ハリカルナッソスのディオニューシオス『リューシアース論』第 4 章 5 節、『イソクラテース論』第 12 章 3 節と第 13 章 2 節おいては、言葉〔verba〕を優先するか思想〔res〕を優先するかによって、リューシアースの文体とイソクラテースの文体を区別している。

143)「掉尾文（circuitus)」は、ペリオドスのこと。ペリオドスは完全文、総合文、周期文、掉尾文などを翻訳される。ペリオドスは、いくつかの節や句が互いに密接に繋がり合い、全体として一つのまとまりある思想を作り、完結する文のことを言う。元々はギリシア弁論術の専門用語であった。キケローは、掉尾文、完全文、総合文（conclusa)、循環文（ambitus）などという言葉を自由に用いている。「掉尾文（circuitus)」という言葉は、この箇所の他に 187 節と 204 節と 206 節で遣われている。20 節と注 32 と注 33 と注 173 参照。

144) ハリカルナッソスのディオニューシオス『リューシアース論』第 8 章 5 節以下を参照。

145) 化粧をしていない女性と飾りのない文体・話し方が比較されている。似た例に『アッティクス宛書簡集』Ⅱ・1（Vulgata)、21（Shackleton Bailey）がある。

146)「カールごて（calamister)」は髪の毛をカールされるために用いられるコテのこと。この比喩は、『ブルートゥス』262 節でも用いられている。そこでは、歴史を書く人々に関連して、「しかし、彼の目的は、歴史を書こうとする人々に使用する材料を提供することであって、歴史を書くさいの材料をカールごてでカールしようとする愚かな者たちから感謝されたであろうが、まともな人々から〔歴史を〕書くことを遠ざけた（Sed dum voluit alios habere parata, unde sumerent qui vellent scribere historiam, ineptis gratum fortasse fecit, qui illa volent calamistris inurere : sanos quidem homines a scribendo deterruit;)」と言われている。

147)「人工的な（fucati)」については、『弁論家について』第 3 巻 199 節で「弁論のこれら三つの型には、いわば優美さの色がなければならないのです。その優美さの色とは、紅色の染料で（fuco）染められた色ではなく、血液によって（sanguine）身体に与えられる色なのです」と言われている。『ブルー

トゥス』36節でも「自然の、人工的でない優美さがある(in qua naturalis inesset, non fucatus nitor.)」と言われている。この箇所については注62を参照。「fucus」は紅色ないし頬紅としての意味で用いられていることもある。『弁論家について』第3巻100節では「人工的な巻き毛や頬紅によって(cincinnis ac fuco)感情を損なうことになる」とある。同書第2巻188節には「子供のような化粧や紅なしに(sine pigmentis fucoque puerili)」とある。

148) おそらくテオプラストスの失われた著作『文体論』のことを指している。テオプラストスについてはハリカルナッソスのディオニューシオス『文章構成法』第16章15節を参照。キケロー自身は、『弁論家について』第3巻37節で「正しいラテン語で、明瞭に、飾りをつけて、何を論じるにしてもその論じる内容にふさわしく調和して語る(ut Latine, ut plane, ut ornate, ut ad id, quodcumque agetur, apte congruenterque dicamus)」と言っている。

149) 『ブルートゥス』29節では、トゥーキューディデースと彼の同時代人たちについて、「彼らは言葉においては重厚であり、警句においては豊かであり(erant .. crebri sententiis)、事の要約においては簡潔であり、まさにこうしたことが原因となって時に曖昧であった」と言われている。

150) 『弁論家について』第3巻149節でも、単独の言葉からなる装飾と結合された言葉からなる装飾に二分されている。結合された言葉については、81節、134節と135節を参照。

151) 「本来の言葉(propriis verbis)」については、『弁論家について』第3巻149節で「したがって私たちが用いる言葉は、本来的であって(propria)、事柄そのものとほとんど同時に生まれた名前で、事柄の特定の名前である言葉か、あるいは、転用されて他の場所に置かれた言葉か、あるいは、私たち自身が新たに作った言葉かのいずれかである」と言われている。

152) 『弁論家について』第3巻152節では、装飾を与えるために用いられる単独の言葉に、「稀語」「新造語」「比喩」の三つが挙げられている。これら三つは、同152節から156節までで、順に説明されている。

153) 「均整(concinnitas)」については、20節、38節、83節、注97を参照。20節では「均整の取れた(concinnus)」という形容詞が遣われている。38節では「優美に組み合わされたもの」と訳した。

154) 思想の装飾〔文彩〕については、136節を参照。

155) 『弁論家について』第3巻165節では、「比喩は慎み深いものでなければならない(verecunda debet esse translatio)」と言われている。『最も優れた種類の弁論家について』4節、『ヘレンニウスへ』第4巻45節、『崇高について』32章を参照。

156) 底本に従わない。底本は「et parcus in priscis reliquisque ornamentis」となっている。「et parcus in priscis in reliquisque ornamentis」と読む。

157) 底本に従わない。底本は「lascivire」である。「sitire」と読む。

158) 『弁論家について』第3巻155節に同じような例が並んでいる。「葡萄の木が宝石をつける」と訳した理由は、本来の用法である「葡萄の木が芽ぐむ(gemmare vites)」という表現をキケローは比

喩表現であるとみなしているからである。「芽ぐむ（gemmare）」は、「宝石をちりばめられている」という転義的な使い方がある。キケローの誤解か、あるいは当時の一般的な理解かのいずれかである。

159）28節を参照。

160）キケローはギリシア語の「σχήματα〔文彩〕」を「光（lumen）」と訳している。ギリシア語の「σχήματα」の原義は「姿」「形」「外見」である。『ブルートゥス』275節では「しかし言葉の光と思想の光があった。ギリシア人たちはそれを姿（σχήματα）と呼んでいる。この光によって、あたかも装飾するさいの輝く飾りによって多彩に彩られるように、弁論全体が多様に彩られる。（Erant autem et verborum et sententiarum illa lumina quae vocant Graeci σχήματα, quibus tamquam insignibus in ornatu distinguebatur omnis oratio.）」と言われている。また同書69節でキケローは、ギリシア語の「σχήματα」を「formae」と訳し、ギリシア語の「τρόποι」を「immutationes」と訳している。「formae」はもともと形式という意味である。また、「τρόποι」はもともと方向という意味であり、「immutationes」はもともと変化という意味である。「τρόποι」と「immutationes」という言葉によって、換喩・提喩が意味されている。181節では「いわば形式と光（quasi formae et lumina）」と言われている。キケロー以後、「figurae」という表現が普通になる。

この『弁論家』という著作では、「文彩」「光」が、まず「言葉の文彩」と「思想の文彩」に二分される（80節）。さらに「言葉の文彩」が「単独の言葉による文彩」と「結合された言葉による文彩」に二分される（80節）。「単独の言葉による文彩」の説明（80節）と「結合された言葉による文彩」の説明（81節と82節）が続く。次に「思想の文彩」の説明（85節）が続く。

161）『ブルートゥス』148節で「クラッススは洗練されている人々の中で最も倹約している。スカエウォラは倹約している人々の中で最も洗練されている（Crassus erat elegantium parcissimus, Scaevola parcorum elegantissimus;）」と言われている。

162）アッティカ風の弁論に装飾は必要ないとする考え方にキケローは反論している。キケローは、平明な話し方をする弁論家はすべての装飾を利用するのではないと考えている。したがって、この話し方の弁論家はどの装飾を利用するのか選択しなければならない。

163）38節と65節を参照。

164）「一つの文字を取り替えること（immutatione litterae）」は、一文字を他の文字に取り替えることで意図的に生まれるある種の言葉遊び。『弁論家について』第2巻256節を参照。そこでは、「ノービリオルは移り気だ（Nobiliorem mobiliorem）」という例文が挙げられている。

165）平明で簡素な話し方をする弁論家のこと。20節と98節を参照。

166）「言葉を繰り返すこと（iterationes）」については135節を参照。

167）「ある種の緊張を（contentionem aliquam）」については、56節と95節を参照。56節では声を張り上げて激しく語ることが意味されている。95節では、会話（sermo）と対比されて、激しく緊張して強調することが意味されている。

168)「ひかえめな(summissio)」は簡素な(tenuis)話し方の特徴。形容詞の「ひかえめな(summissus)」は 76 節、82 節、90 節、91 節、99 節で用いられている。『弁論家について』第 3 巻 212 節を参照。

169)「最も柔らかい(mollissimis)比喩」は、「ぎこちない・硬い(duris)比喩」と対比される。『弁論家について』第 3 巻 165 節を参照。クインティリアーヌスは、「硬い比喩」を類似点が遠すぎると説明している。『弁論家の教育』第 8 巻第 6 章 17 節を参照。

170)「光(lumen)」については注 238 と 83 節の注を参照。

171)「国家に語らせる(rem publicam loquentem)」という比喩は、キケロー自身がしばしば用いている。『カテリーナ弾劾』第 1 演説 18 節では「祖国が語る(patria loquitur)」と言われている。同 27–29 節、第 4 演説 18 節を参照。また、『クイントゥス・カエキリウスを駁す予選演説』19 節を参照。これは擬人法である。擬人法については、『弁論家について』第 3 巻 205 節で「あたかも人が語っているかのように描くこと(personarum ficta inductio)」と説明されている。『ヘレンニウスへ』第 4 巻第 53 章 66 節では「conformatio」と呼ばれている。ギリシア語では「προσωποποιία」と言われる。

172) 死者を蘇らせて弁論することについては『弁論家について』第 1 巻 245 節、『ブルートゥス』322 節と『トピカ』45 節を参照。

173)「多くのことをひとまとまりにして完全文の中に縛りつけることもしないでしょう(nec acervatim multa frequentans una complexione devinciet)」については、『弁論家について』第 3 巻 182 節に「一息で発音することができる言葉のひとまとまりの完全文が最も長い(Longissima est igitur complexio verborum, quae volvi uno spiritu potest;)」とある。『ブルートゥス』140 節では「しかしながらアントーニウスは、言葉を選び取り、魅力のためにというよりは重々しさのためにそうしたのですが、言葉を配列し結びつけて完全文にするとき、まったく理にかなっていて、あたかも教科書に従っているようだった。(sed tamen Antonius in verbis et eligendis, neque id ipsum tam leporis causa quam ponderis, et conlocandis et comprehension devinciendis nihil non ad rationem et tamquam ad Artem dirigebat;)」とある。

「complexio」はギリシア語のペリオドス(περίοδος)の訳語の一つ。キケローはペリオドスを、「complexio」85; de Or. iii 182, Brut. 140、「ambitus」204, 207, 208, 212, 221, 222; de Or. iii 186, Brut. 162、「circuitus」78; de Or. iii 191、「comprehensio」149, 198, 199, 204, 208, 212, 221, 223–225; Brut. 34, 96, 140, 162, 327、「continuatio」204, 208; de Or. i 261, iii 171、「circumscriptio」30, 200, 204, 208; Brut. 34 とさまざまなラテン語に訳している。注 143 を参照。

174)「もっと強い話し手」のこと。荘重な話し方をする話し手には、平明な話し方をする話し手よりも強い肺活量が必要となる。

175)「表情(voltus)」については、『弁論家について』第 1 巻 127 節、第 3 巻 221 節を参照。動作と感情については『弁論家について』第 3 巻 220 節を参照。

176)「しかめ面をすること(os ducere)」については、クインティリアーヌス『弁論家の教育』第 9 巻

第 3 章 101 節を参照。

177)「冗談という塩（sales）」は、「ユーモア（facetiae）」と「ウイット（dicacitas）」を総称する用語として用いられている。『弁論家について』第 1 巻 159 節では、「facetiae」が「ユーモア」や「ウイット」を総称する用語として用いられている。そこでは「すべての種類の洗練された言葉遣いから、ユーモアのおかしみを摘み取り、それをいわば塩のように弁論全体にふりかけなければならない（libandus est etiam ex omni genere urbanitatis facetiarum quidam lepos, quo tamquam sale perspergatur omnis oratio.）」と言われている。また、『弁論家について』第 2 巻 218 節でも、「facetiae」が「冷やかし（cavillatio）」と「ウイット（decacitas）」を総称する用語として用いられている。同 240 節では、「facetiae」は事柄によるものと言葉によるものに二分されている。このようにユーモアやウイットを表す用語は一定していない。同 234 節では、こうしたユーモアやウイットは冗談や冷やかし等とともに「滑稽なもの（ridicula）」としてひとまとまりにされている。「滑稽なもの」については同 217–289 節を参照。

178)「おどけたもの（scurrile）」、「笑劇の（mimicum）」にならないようにすることは『弁論家について』第 3 巻 239 節、242 節を参照。

179)「冷めたもの（frigida）」は興ざめになるということ。『弁論家について』第 2 巻 256 節では、「しかし、両義的なものの種類は多く、それについての教義のようなものも、いささか込み入ったものですので、言葉を吟味し、よくよく注意しなければならないでしょう。そのさい、興ざめするような言葉を避け――というのも、冗談がわざとらしいと思われないようにしなければならないからです――多くを明瞭に語ることになるでしょう（Sed cum plura sint ambigui genera, de quibus est doctrina quaedam subtilior, attendere et aucupari verba oportebit ; in quo, ut ea, quae sint frigidiora, vitemus, —est enim cavendum, ne arcessitum dictum putetur —permulta tamen acute dicemus.）」と言われている。またクインティリアーヌス『弁論家の教育』第 9 巻第 3 章 74 節、第 2 巻第 4 章 29 節を参照。

180)「侮辱の言葉（contumelia）」については、『弁論家について』第 2 巻 222 節で、「（しかし、クラッススは、スカエウォラに対しては、そういった〔気の利いた〕言葉を控えて、侮辱の棘をまったく含まないもう一つの種類のユーモアを用いて彼の主張や議論をからかったのですが、他方でブルートゥスに対しては、彼を嫌悪し侮辱に値するとみなしていたので、両方の種類のユーモアを用いて戦ったのです。（Sed ut in Scaevola continuit ea Crassus atque in illo altero genere, in quo nulli aculei contumeliarum inerant, causam illam disputationemque elusit, sic in Bruto, quem oderat et quem dignum contumelia iudicabat, utroque genere pugnavit.）」と言われている。

181)「ウイットとユーモア（sale et facetiis）」は、直訳すると「塩とユーモア」となる。文脈から「塩（sal）」を「ウイット」と訳した。

182)「塩味の効いたもの（salsum）」は、「気の利いた、当意即妙の、機知のある」という意味。『弁論家

について』第2巻217節では「しかし私は、ギリシア人たちの言うところの滑稽なものどもや気の利いたものどもを多く見つけた。この種のことに関しては、シキリア人たちもロドス人たちもビザンティオン人たちも、そして他の人々たちよりもアテーナイの人々は優れているからです。しかし、こうしたもののある種の理論と技術を教えようとしとしてきた人々は、あまりにも味がなさすぎて、彼ら自身の無味乾燥さ以外に笑うべきことがないほどなのです(inveni autem ridicula et salsa multa Graecorum ; nam et Siculi in eo genere et Rhodii et Byzantii et praeter ceteros Attici excellunt ; sed qui eius rei rationem quandam conati sunt artemque tradere, sic insulsi exstiterunt, ut nihil aliud eorum nisi ipsa insulsitas rideatur;)」と言われている。また同260節では「ルーキウス・[ポルキウス・]ナーシーカが監察官カトーに答えた言葉も滑稽なものです。彼は、「汝の良心の声に照らして、汝には妻はいるか」と問われて、「誓って、私の良心の声に照らせば、いません。」と答えた。これは、興ざめするものになるか、あるいは、気の利いたものになるかのいずれかです。後者になるのは、別の答えが予期された場合です。というのも、すでに述べたように、私たちの思い違いが私たちを愉快にさせるのは当然のことであって、予期したものにいわば欺かれたとき思い違いにから私たちは笑うのです。(Ridicule etiam illud L.[Procius] Nasica censori Catoni ; cum ille 'ex tui animi sententia tu uxorem habes?' 'Non hercule' inquit 'ex mei animi sententia.' Haec aut frigida sunt aut tum salsa, cum aliud est exspectatum. Natura enim nos, ut ante dixi, noster delectat error ; ex quo, cum quasi decepti sumus exspectatione, ridemus.)」と言われている。なお、この監察官の逸話についてはアウルス・ゲッリウス『アッティカの夜』第4巻20節を参照。「塩味の効いたもの」については、さらに『弁論家について』第2巻251節、255節、278節を参照。また、『神々の本性について』第1巻79節では、人間の魅力を説明するさいに、この言葉が用いられている。

183)「健全なもの(salubre)」は、『ブルートゥス』51節でも用いられている。そこでは、アジア主義とアッティカ主義の対立を念頭におきながら、キケローは次のように言う。「雄弁がピーラエウスから出航するとすぐに、すべての島々をめぐり、全アジアを旅してまわった。その結果、外国の習慣で自らを塗りたくり、アッティカ風の表現の健全さといわば健康を失い、話し方をほとんど忘れてしまった。(Nam ut semel e Piraeo eloquentia evecta est, omnis peragravit insulas atque ita peregrinata tota Asia est, ut se externis oblineret moribus omnemque illam salubritatem Atticae dictionis et quasi sanitatem perderet ac loqui paene dedisceret.)」。また、『最も優れた種類の弁論家について』第8節を参照。

184) リューシアース(Lysias)は、前458年頃―380年頃、アテーナイの弁論家。ヒュペレイデース(Hyperides)は、前389年―322年、アテーナイの弁論家。『弁論家』中でリューシアースが言及されているのは29, 41, 90, 110, 226節である。『弁論家』中でヒュペレイデースが言及されているのは90, 110節である。リューシアースとヒュペレイデースについては『ブルートゥス』67節と68

節を参照。

185）デーマーデース（Demades）は、前 380 年頃―318 年、アテーナイの弁論家。マケドニアを支持して、デーモステネースの敵となる。この著作中で言及されているのはこの 90 節のみ。

186）デーモステネースは、前 384 年頃―322 年、アテーナイの弁論家。反マケドニアの論陣をはった。『弁論家』中で彼が言及されているのは、6, 15, 23, 26, 27, 29, 56, 90, 104,（105）, 110, 133, 136, 151, 226, 234, 235 節である。

キケローは、冗談に関してはデーモステネースがあまり優れていないとみなしている。一般には、デーモステネースには冗談が欠けていると思われていた。クインティリアーヌス『弁論家の教育』第 6 巻第 2 章 1 節以下を参照。そこでは、笑いの能力に関しては、デーモステネースが欠いていて、キケローが長けていたと一般に考えられていたと言われている。ハリカルナッソスのデイオニューシオス『デーモステネース論』第 54 章 8 節を参照。『デーモステネース論』のこの箇所はテキスト上の問題があり、デーモステネースが冗談を欠いている〔λείπεται εὐτραπελίας〕という校訂と、冗談を欠いていない〔οὐ λείπεται εὐτραπελίας〕という校訂がある。ヒュペレイデースとデーモステネースの比較については、伝ロンギーノス『崇高について』第 34 章を参照。

187）「平明な（humilis）」については、注 210 を参照。

188）97–99 節。

189）99 節を参照。

190）パレーロンはアテーナイの港。デーメートリオスは、紀元前 4 世紀に活躍したアテーナイの政治家・弁論家。テオプラストスの弟子。『弁論家』中でデーメートリオスが言及されているのは 92 節と 94 節である。『ブルートゥス』37 節と 38 節でデーメートリオスについて次のように言われている。

「**37**　これらの長老たちの後に続くのがパレーロン出身のあの若者で、彼は彼らの全員の中で最も教養がありますが、しかし実戦的というよりはむしろ格闘技向きに教育されていました。したがって彼は、アテーナイの人々を燃え立たせるというよりは楽しませていたのです。というのも彼は灼熱の太陽と埃の中で生まれたのですが、軍隊のテントから生まれたのではなく、最も博学な人物であるテオプラストスという日陰のある場所〔学園〕から生まれたのです。**38**　彼は初めて弁論の調子を変えて、弁論を柔らかくしなやかにしました。本人がそうであったように、彼は重々しく見えるよりも魅力あるように見えることを選びました。その魅力は、心を圧倒するようなものではなく、心に染み渡るようなもので、そのために彼が聞き手の心の中に残したのは、エウポリスがペリクレースについて記したような楽しみと辛辣さではなく、自分の優美さの記憶だけなのです。（**37** Phalereus enim successit eis senibus adulescens eruditissimus ille quidem horum omnium, sed non tam armis institutus quam palaestra. Itaque delectabat magis Atheniensis quam inflammabat. Processerat enim in solem et pulverem, non ut e militari tabernaculo, sed ut e Theophrasti doctissimi hominis umbraculis. **38** Hic primus inflexit orationem et eam mollem teneramque

reddidit et suavis, sicut fuit, videri maluit quam gravis ; sed suavitate ea, qua perfunderet animos, non qua perfringeret, [et] tantum ut memoriam concinnitatis suae, non, quem ad modum de Pericle scripsit Eupolis, cum delectatione aculeos etiam relinqueret in animis eorum a quibus esset auditus.)」と言われている。

191) 21節、99節を参照。

192) エンニウス『アンドロマカ』断片88(Vahlen)=XXXVII 81-86(Jocelyn)。Vahlen, J., ed. *Ennianae Poesis Reliquiae,* Leipzig, 1928[3]; Jocelyn, H. D., ed., *The Tragedies of Ennius,* Cambridge, 1969. 引用中の「私」はアンドロマカのことである。「祖国」の代わりに「城」と語られている。『トゥスクルム荘対談集』第3巻44節でも引用されている。

193) エンニウス『年代記』断片309(Skutsch)。Skutsch, O., ed. *The Annals of Q. Ennius*, Oxford, 1985.「アーフリカの人々が」の代わりに「アーフリカが」と語られている。『弁論家について』第3巻167節ではエンニウスの名前をあげることなく「荒れ狂うアーフリカの大地が騒乱に震える(Africa terribili tremit horrida terra tumultu)」と引用されている。

194) クインティリアーヌス『弁論家の教育』第8巻第6章23節では、換喩が換置とも呼ばれていたことの証拠としてキケローのこの言葉を紹介している。

195) アリストテレースの比喩については『詩学』21章を参照。アリストテレースが「換置」と「提喩」を「比喩」に分類している箇所は、アリストテレースの現存する著作にはない。そもそも彼は「換置」や「提喩」といった用語を用いていない。

196) 濫喩については、『弁論家について』第3巻169節、ハリカルナッソスのディオニューシオス『文章構成法』第3章11節、『ヘレンニウスへ』第4巻第33章35節、クインテリアーヌス『弁論家の教育』第8巻第2章6節を参照。濫喩とは、「机の脚」のように、本来の表現を欠いているため最も近い言葉を借りて用いること。

197) クインティリアーヌス『弁論家の教育』第8巻第6章2節では、「比喩は言葉の意味のために用いられるか、飾るために用いられるかである(quosdam gratia significationis, quosdam decoris adsumi)」と言われている。また同6節では、必然、意味の明確化、適切化の三つが挙げられている。

198) アレゴリーは、もともとは「もう一つの別の話」という意味。諷喩のこと。『弁論家について』第3巻166節では「この種の比喩から生まれてくるものは、一つの単語の比喩によるのではなく、複数の連続する言葉によって結びつけられ、その結果、語られていることと理解されるものとが別々のものになるような比喩である。(nam illud, quod ex hoc genere profluit, non est in uno verbo translato, sed ex pluribus continuatis conectitur, ut aliud dicatur, aliud intellegendam sit)」と言われている。クインティリアーヌス『弁論家の教育』第8巻第6章44節以下を参照。同14節、同第9巻第2章46節では、連続する比喩がアレゴリーを生むと言われている。

199) アリストテレースは比喩の一つひとつに名前をつけて説明しているわけではない。アリストテレー

スは比喩という一般的な命名で満足しているように見える。ここでのキケローの主張は前後の文脈と関係ない。

200）名前をあげずに出身地だけをあげている。92節、『ブルートゥス』37節を参照。

201）「言葉の光」と「思想の光」とキケローが言っているのは、「言葉の文彩」と「思想の文彩」のことである。キケローはfigura〔文彩〕ではなくlumen〔光〕という言葉でギリシア語の「σχήματα〔文彩〕」を訳している。83節を参照。

202）この種の話し方で最も優れているとキケローがみなしているパレーロンのデーメートリオスはペリパトス派の哲学者でもある。

203）「壮麗で（amplus）豊富で（copiosus）重厚で（gravis）華麗な（ornatus）弁論家です」については20節を参照。30節ではリューシアースが壮麗で（amplus）も荘重で（grandis）もないとされている。

204）『ブルートゥス』38節では、デーメートリオスとペリクレースとが対比されている。92節とその注を参照。

205）91節を参照。

206）「静かに（traquille）」、「穏やかに（leniter）」は、中間の種類（genus medium）の特徴である。21節を参照。92節ではこの種類の話し方は「落ち着いて緩やかに流れる（sedate placideque labitur）」と言われている。

207）「配列に適切に配慮して（partite）」、「はっきりと（definite）」、「明確に（distincte）」、「機知に富んで（facete）」は、平明な種類（genus tenue）の特徴である。

208）「主題に火をつけ燃え上がらせる始める（inflammare rem coepit）」は、聴衆の心に嫉妬や憎しみの感情を喚起すること。『弁論家について』第2巻209節では「もし、主題を燃え上がらせる必要があるならば、それが徳によってもたらされものではないと語るべきです。次にそれが悪徳と罪によってもたらされたのだと語るべきです。そして最後に、それがたとえ名誉なことであり重要なことであったとしても、当人が傲慢に振る舞っているのであって、嫌悪するに値するほどの価値もないと語るべきです。（quae si inflammanda sunt, maxime dicendum est non esse virtute parata, deinde etiam vitiis atque peccatis, tum, si erunt honestiora atque graviora, tamen non esse tanta illa merita, quantam insolentiam hominis quantumque fastidium;）」と言われている。

209）「荒れ狂っている（furere）」については、『ブルートゥス』233節で、「彼〔ガイウス・フィンブリア〕は、あらゆることを声を張り上げて語っていて、言葉はまったく悪くはないのだけれども、言葉の流れがいわば激烈で荒れ狂っていて、弁論家たちの間に狂人のための場所を確保しようとして人はいろいろなことをするものだと君は驚いたほどだった（qui omnia magna voce dicens verborum sane bonorum cursu quodam incitato ita furebat tamen, ut mirarere tam alias res agere populum, ut esset insano inter disertos locus.）」と言われている。

訳者後記

キケロー『弁論家』75 節から 99 節までの翻訳である。『弁論家』1 節から 74 節までの概要は、「キケロー『弁論家』(3)」の訳者後記(『大阪大学大学院人文学研究科紀要　第 1 巻』(令和 6 年 3 月) 274 頁に記した。

『弁論家』75 節から 99 節までは、三つの話し方、三つの文体について一つひとつ論じている箇所である。その概要は次の通りである。

75 節―99 節　三つの種類の話し方について
　75 節―90 節　平明な話し方
　91 節―96 節　中間の話し方
　97 節―99 節　荘重な話し方

『弁論家』で論じられている「話し方」は、いわゆる文体のことである。キケローは書かれた文章よりも話された文章を重視している。弁論家がどのような口調でどのような案件に対してどのような修飾をして、どのような姿勢で語るべきなのか、これがキケローの言う「話し方」である。したがって、三つの種類の話し方は、三つの種類の弁論家となる。三つの種類の弁論家にはそれぞれに固有の型というものがある(75 節)。これら三つの型が詳しく論じられている箇所が 75 節から 99 節である。

この箇所で最も重要なのは、全体の配分からも分かるように、75 節から 90 節までで論じられている「平明な話し方」である。序文でキケローは、人々はアッティカ風に話す弁論をもてはやし、荘重に話す弁論をアジア風とみなして軽蔑しているが、彼らは本当のアッティカの弁論を知らないと言う(22 節と 23 節)。したがってこの著作の中で、アッティカの弁論とは本当のところどのようなものなのかを説明しようとキケローは言う(24 節)。アッティカの弁論とはつまり「平明な話し方」のことである。「平明な話し方」の型とは何かがこの箇所で示されているのである。「理想的な弁論家」はどのようなものかというのが『弁論家』の主題であった(3 節から 6 節)。表向きは、したがって、「理想的な弁論家」がここで説明されているのであるが、キケローの説明は客観的なものではなく、アジア風だとみなされ批判されたことへの反論であり弁護ともなっている。

一般に、アッティカ風の弁論に比喩などの装飾は必要ないと考えられているが、この考えにキケローは反対している。キケローは、「平明な話し方」をする弁論家はすべての装飾を利用すべきではないと考えているが、全く利用するなとは言っていない。したがって、「平明な話し方」の弁論家はどの装飾を利用するのか吟味して選択しなければならないのである(84 節)。

Summary

Cicero's *Orator* (4)

Translated by Koji WATANABE

This is my translation of §§75 to 99 of *Orator* of Cicero.

In §§75 to 99, Cicero discusses there styles : plain, medium and grand. Each of these three styles has its own form (§75).

Of the three styles the most important is the plain style. In the preface, Cicero says that people praise Attic style of speech and despise grand style of speech, which they consider to be Asiatic, but that they do not know true Attic style of speech (§22 and §23). Cicero maintains that he will explain what true Attic style is (§24). The theme of *Orator* is what the "ideal orator" is (§3 to 6). The Attic style of speech as the ideal oration is explained here in these sections.